

8. 最近経験した Radiation hepatitis の症例

○中田新二郎 渡辺克司 三原桂吉
(九州大学 放射線科)

肝臓に近接した臓器の悪性腫瘍の放射線治療においては、止むをえず肝臓が照射されることがある。このような場合照射部位に一致して、肝シンチグラム上に欠損像

が現われることが本邦および諸外国において報告されている。

最近、われわれは上記のような所見を呈した症例、数例を経験したので、その症例を供覧し、文献的考察を加える。

*

シンポジウム：各種病院における核医学のあり方

1. 鹿大病院中央 RI 室の運営に関して

○有川憲蔵 篠原慎治
(鹿児島大学 放射線科)

核医学は臨床放射線医学のうち放射線診断学、治療学と並んで三本の柱となっており、最近における臨床核医学の進歩・普及には目ざましいものがあり、従来のX線診断および血管造影検査に加えて、RI 診断を加えれば、ほとんど総ての臓器の疾患の診断は可能であるといつても過言ではないといえるほどである。

しかしながら RI 診療は防護面の必要から、他の放射線診療の場とは別な施設が必要であることはいうまでもないが、放射線治療として共通の知識技能を必要とするから、これを放射線医学の範疇から切り離すことはできない。RI 診療施設はできたとしても、最も重要なことは、これを放射線科（中央放射線部を含めて）といかなる関連において運営してゆくかであるが、この運営面については、それぞれの病院における人的・物的事情と内部機構などの諸因子によって、必ずしも放射線科の将来とその発展のために好ましい形態がとられているとはいえない状況を散見する現状である。われわれは鹿大病院中央 RI 室における RI 診療の推移と運営の現状について報告すると共に、われわれの採っている運営法による長所・短所に関して解析を加え、放射線科それ自体としての RI 診療の増加に加えて、各科からの RI 診療の依頼要望について中央的存在としてこれに応えてゆかねばならぬという二面性を両立させるための人的・物的なトラブルおよび各科との関連における問題点（どこ迄各科に許容するか、各科の RI 診療に従事する医師の level の問題、routine の RI 診療の範囲と各科におけるリサーチ的な RI 診療に対するサービスの限界点など）についてふれ、RI 診療はあく迄も放射線科(医)がその主体性および主導権をもって実施されねばならぬことを――

これには現時点では種々の困難性があるが——強調し、この実現のためには発足の当初における system の重要性である。

*

2. 熊本大学病院放射線科の核医学診療の現況について

片山健志 ○金子輝夫 松本政典
(熊本大学 放射線科)

熊本大学病院放射線科にみける RI 診療の過去数年間の推移と現況について述べ、併せて核医学診療関係患者数増加に対する将来の施設、機器、人員に関する希望を述べる。

- 1) 過去数年間の RI 診療の種目と件数の年度別の推移、および月別の内訳。
- 2) 現在の施設および管理の状態。
- 3) 現在稼働している放射線測定器の種類、台数および従事者数。
- 4) 使用核種と使用量および収入点数の概要。
- 5) 将来購入希望機器と設備、それによる臨床検査件数の増加と処理件数の見込収入の予想。

*

3. 大学病院における核医学のあり方について

中川昌壯
(熊本大学 内科第三講座)

核医学の分野における近年の進歩と普及はめざましく、臨床各科においてもその診断、治療面への応用は漸次拡大しつつあり、各科との関連も非常に密接となってきている。しかし、その過程もわが国では長近十カ年余りの比較的短期間の開発、普及であったがために、現時点においてはその取入れ方や運営の面で立ち遅れの感が深く、

現在の広範囲で活発な臨床応用の要求に必ずしも適合する態勢とはいひ難い。その立ちおくれに伴う制度や運営上の問題は今後の需要の拡大につれ、一層切実になってゆくものと考えられる。

それらの問題点について要約すると、

1. 臨床応用については、その技術やデーターの分析にあたり臨床各科の専門的知識を必要とするが、各専門分野の人々が積極的に参加できる機構が十分でない。

2. 高価な測定記録機器の購入整備には、使用者の要望に応じ、かなりの程度の RI 検査、治療が必要に応じて施行できるような態勢が整えられることが必要であるが、必ずしも十分でない。

3. 大学病院としての教育研究上の目的が達成され易いように設備や機器が使用できるための運営面の配慮が必要であること。

などにまとめられると思う。

以上のごとく、核医学が内科、放射線科を中心にして各科にまたがる境界領域の臨床応用の医学分野であるという特殊性をもち、高価な機器や放射性医薬品と基準に適合した特別の施設を使用するという点に、さらに、大学病院の教育、研究機関としてのみならず、診療機関としてその地域社会であるいは唯一の RI 使用施設であることを加味して考慮するならば、核医学をより効果的にとり入れ、運営することが是非必要となってくる。

現状にもとづき、一内科医として私見を述べ、批判を仰ぎたい。

*

4. 九大病院における核医学の現況

渡辺克司

(九州大学 放射線科)

核医学は RI を用いて診療を行なうものであるが、今後、この方面における RI の利用は益々増加していくものと考えられる。

医学における RI の利潤は、大きく分けると、機能的検査と形態的検査がある。いずれも RI の放出する放射線を頼りに診断を行なうものであるから、核医学診療の中心は放射線科であると思う。しかし、実際には RI の利用が医学の極めて広い領域に及ぶため、放射線科のみで全般をカバーすることは困難である。病院における RI 診療が合理的に行なわれるためには、管理、運営と設備が充分であることが必要である。これによって各診療科との協調が可能になる。

九大病院における、 RI 診療の現況について述べた。

*

5. 当院における RI 診療

佐々木 潔

(国立福岡中央病院 放射線科)

最近の核医学の進歩は目ざましく、ことに診断面では、従来盲点とされていた検査が可能となり、また他の検査法では、非常に手間のかかるものが簡単に検査できるようになつたりして、極めて重視されるようになった。総合病院においても、 RI 診断に対する各科の認識が高まりつつあり、かつ要望も増してきている。

総合病院において、核医学が十分よく生かされて行くためには、専任の医師の存在が必要である。しかし多くの病院においては、放射線科の医師は少数であり、手不足であることが多い。当院もその例外ではない。当院ではこれを補うため、技師 1 名をおき、医師の仕事を最小限に止め、他はすべて技師の手に委ねることにしている。当院でこれまで実施した RI 検査法は、甲状腺、肝、肺、腎、脳、心臓、脾などのシンチグラム、甲状腺摂取率測定、レノグラフィ、組織クリアランス、心放射図などの動態機能検査、脂肪消化吸収試験、赤血球寿命測定、血漿鉄消失曲線、V-B₁₂ 吸収試験、アイロソルブテストなどである。このほかにも他科から要求されている検査があるが、医師の手不足で実施できずにいるものもある。長近はテトラソルブテストやイムノアッセイなどの生化学的検査が開発されてきており、他科からの要望も多い。これらの検査法は医師の手を必要とせず。

今後伸ばして行くことのできる検査法と考えている。

更にはシンチカメラなど、設備を向上させて、検査の能率化や、新しい検査法を取り入れて行くことも必要と考えられる。

総合病院における診療のもう一つの問題点は、未だ健康保険に採用されていない RI が多いこと、国立病院では、 RI 検査点数か検査科の点数に入れられること、などである。これらの改善が望まれる。

*